

# バリ・ヒンドゥー教の バユ・オトン儀礼について

山 口 し の ぶ

## 1. はじめに：オトナン儀礼とバユ・オトン儀礼

インドネシア、バリ島では多くの人々がヒンドゥー教を信仰している。バリ・ヒンドゥー教では通過（人生）儀礼、年中儀礼などが頻繁に行われる。通過儀礼のうち最も重要なもののうちの 하나가、「オトナン」（バリ語（以後B.と表記）、Otonan）と呼ばれる子どもが生まれて一年目（バリのウク暦では210日目）の誕生を祝う儀礼である。オトナン儀礼は子どものために魔を払い、天界にいると考えられている子どもを地上に迎える儀礼である<sup>1</sup>。オトナン儀礼はバリ・ヒンドゥー教徒が子どもの幼少期に執り行う基本的な儀礼であるが、事情によってはその儀礼が適時に行われない場合もある。その場合、各人の希望により「バユ・オトン」（B. Bayuh Oton）と呼ばれる儀礼を誕生1年目以降に行うことがしばしばある。このバユ・オトン儀礼にも、オトナンと同様悪魔や災難から儀礼を受けた人を守る役割がある。バユ・オトンは幼少期から成人して以降まで、時期を家族や本人が決定し自由に僧侶に実施を依頼することができる。

筆者は2017年11月21日、バリ州Bangli県Kintamani地区で行われたバユ・オトン儀礼を観察する機会を得た。このバユ・オトンでは儀礼を依頼した祭主は、子供のころオトナン儀礼を受けておらず、成人後しばらくたってから自らの保護のためにバユ・オトンを行うことにした。本稿では、この日行われたバユ・オトン儀礼の次第とその特色について述べ

---

<sup>1</sup> オトナン儀礼では、親やブマンク僧の妻が抱えて地上を歩かせるという行為が行われるが、この行為は生後3か月の子どもの儀礼「トゥルブランin」（B. Tulbralinin）でも行われる。これについては（山口 2015）参照。

たい。

## 2. バユ・オトン儀礼の次第

2017年11月21日にバリ州Bangli県Kintamani地区Lateng村で行われたバユ・オトン儀礼は以下の次第からなる。この儀礼に先立ち、祭主（当時47歳）は、Tabanan県Baturiti地区にある氏の実家に立ち寄り、家族のメンバーに前もって用意してもらっていた、近隣の川の水を詰めた瓶を受け取った。その後祭主はその瓶の水を自身の家庭寺院（B. merajan）の中心的な社<sup>2</sup>（B. kumelan）に供え、神々に礼拝する（写真1）。これは自身の家庭寺院に礼拝し、川から入手した水を浄化する行為と考えられる。

その後祭主は当日バユ・オトン儀礼の実施を依頼した、Lateng村の宗教施設Griya Giri Gosramaに向かった。当施設は信者に対して儀礼が行われる宗教施設（B. asrama）であるとともに、儀礼執行者である僧侶イダ・パンディタ・ムプ・パラマダルマ Ida Pandita Mpu Parama Dharma師<sup>3</sup>の住居でもある。ちなみにバリ・ヒンドゥー教の僧侶には、シヴァ系（Ajaran Siwa）、ブッタ系（Ajaran Buda）<sup>4</sup>、ヴィシュヌ系（Ajaran Wisnu）の三系統があるが、パラマダルマ師はシヴァ系の僧侶である。本稿で述べるバユ・オトン儀礼は、師の家庭寺院でもある施設内の寺院で午前12時58分から約1時間かけて執り行われた。儀礼の際、

---

<sup>2</sup> 通常家庭寺院で見られるKumelanは、茅葺きの屋根を付け、3つの扉がある空間を備えた高床式の社であり、ヒンドゥー教の三大神ブラフマ（ブラフマー）、シワ（シヴァ）、ウイスヌ（ヴィシュヌ）を祀る。（Eiseman 1990: 273）参照。

<sup>3</sup> 師の称号であるIda Pandita MpuもしくはIda Mpuは、ブダダ僧（B. pedanda）のようなブラフマナ階級ではないが、師（guru）に就いて専門的な訓練をうけ、他の非ブラフマナ階級のプマンク僧（B. pemangku）よりも多くのマントラやムドラーを使用して儀礼を行う僧侶を指す。

<sup>4</sup> バリ・ヒンドゥー教においては、シヴァ神とブッタを同一視する「シヴァ=ブッタ」観念がポピュラーであり、インドネシアの公認宗教の一つである仏教とは別にこの観念はヒンドゥー教内部で認識されている。バリに見られるシヴァ=ブッタ観念については（山口 2019）参照。

僧侶は前半の準備的儀礼の際にはサンスクリットとバリ語の混成テキスト *Wedaparikrama* を、また後半の中心的儀礼の際には同様に古ジャワ語およびサンスクリットからなる *Bayuh Oton Ring Kamulan* の記述を参考にし、また僧自身の師から習ったマントラや印を使用して儀礼を行っていた。

*Wedaparikrama* には儀礼の手順がバリ語、マントラがサンスクリットで述べられているが、このテキストは1933年にインド学者である Sylvain Lévi がバリで入手した複数のサンスクリット・テキストを集成した *Sanskrit Texts from Bāli* (Gaekwad's Oriental Series No.62, Gaekwad Oriental Institute, Baroda) に所収されている。また同テキストは、2007年にインドネシア人研究者の G.Pudja がテキストとインドネシア語訳および解説を出版している (Pudja, G. 2007, *Wedaparikrama, Pāramita*, Surabaya)。また今一つのテキストは、筆者が儀礼執行者のパラマダルマ師が所蔵されているバリ文字で記された写本である。以下に11月21日に行われたバユ・オトン儀礼の次第を述べよう。

## 1) バユ・オトン儀礼の構成

### < 1 > 準備的儀礼

- <1.1> 聖水 (B. tirta) 作り (B. Argha patra<sup>5</sup>) とマントラによる供物、器具、僧の身体の浄化
- <1.2> 聖水による浄化 (B. Ngelisin)
- <1.3> 神々を儀礼の場に引き寄せること、および神々への供物の献供 (B. Ngayabang Banten)
- <1.4> 悪鬼への供物の献供 (B. Ngayabang Segehan)

### < 2 > 中心的儀礼

- <2.1> byakala 供物への natab
- <2.2> Bayuh Oton の natab
- <2.3> 聖水による浄化 (B. Melukat)

<sup>5</sup> サンスクリットで 'arghapātra' の語はあるが、Monier Williams, Sanskrit English Dictionary によれば、その語は客人が到着した時に供する水の入った器を指す。

<2.4> 儀礼用ブレスレットの着用 (B. Mejayajaya)

<2.5> すべての供物へのnatab

<2.6> 礼拝 (B. Sembahyang)

<2.7> 聖水を求めること (B. Nunas Tirta)

### < 3 > 結びの儀礼 プラス供物へのnatab (B. Natab Banten Peras)

## 2) バユ・オトン儀礼の記録

### < 1 > 準備的儀礼

<1.1> 聖水作りと供物、器具、僧の身体の浄化

この日のバユ・オトン儀礼は、施設内の寺院の一番手前にある pawedaan という建物で行われた (写真 2)。寺院境内には pawedaan とは別の pangungan と呼ばれる供物台があり、そこにも多くの供物が置かれていた (写真 3)。いっぽう pawedaan にも花や果物、菓子、揚げた鶏肉、卵、葉や穀物を組み合わせで作られた供物等が並べられ、僧はそれらの供物に正面を向いて儀礼を始める。

僧は最初に聖水を作る行為を行う。ここでは、まず僧は儀礼用の衣服と帯 (B. santog) を身に着ける。その際僧は、順に “*om taṃ mahādevāya namaḥ*” (衣服着用時)、“*om aṃ śivasthītikāya namaḥ*” (薄く長い上衣着用時)、“*om maṃ īśvarāparamaśivāya namaḥ*” (santog着用時) というマントラ<sup>6</sup>を唱える (写真 4)。その後僧は、供物を背にして座り、僧自身を水で浄化する。

そこでは最初に “*om khaṣolkāya īśvarāya namaḥ svāhā*” と唱え足を、“*om hraḥ astrāya namaḥ*” のマントラで両手を、さらに “*baṃ uṃ hraḥ phaḥ astrāya namaḥ*” で口を手を持った瓶の水をかけて浄化する<sup>7</sup>。それから僧はアストラ印 (astramudrā) を結び、「自身を浄化せよ」という一連のマントラを唱える。この部分は *Wedaparikrama* にはなく、僧が

<sup>6</sup> 以上3つのマントラは (Pudja 2007: 61-63) (Lévi 1933: 7) 参照。本稿におけるサンスクリットのマントラの表記は、できるだけ一般的なサンスクリットのローマ字表記を用いた。そのためバリでは例えばしばしば ŚivaがSiwa、ViṣṇuがWisnuと表記され、またvaがwaと表記、発音されるが、その場合vaのままとした。

<sup>7</sup> 以上の3つについては (Pudja 2007: 65-67) 参照。

自身の師から印とともに教えてもらったとのことである。その後僧は“*oṃ uṃ raḥ phaṭ astrāya namaḥ*”云々というマントラ<sup>8</sup>を唱え、胸の前で両手を挙げ、両手の中指の先を着ける印を結ぶ。この日の儀礼の執行者であるイダ・ムプ・パラマダルマ師によれば、これは怒りや欲望などの内部のけがれを浄化する行為である（写真5）。

続いて僧は、供物の方を向いて座りなおし、シヴァ神に礼拝するマントラを唱えながら印を結ぶ。僧はその印を「シヴァの舞踊の印」(B. tarian siwa)と呼んでいる。次に儀礼で使用される器具が浄化される。ここでは僧は、線香を手にし、“*oṃ aṃ dhūpadīpa astrāya namaḥ*”と唱える。その後僧は、「アストラ・マントラ」 (“*oṃ uṃ raḥ phaṭ astrāya namaḥ. oṃ ātmā tattvātmā śuddha māṃ svāhā*”以下略)を唱えて、自身の前にある容器 (B. swanba) の聖水を、草で作った刷毛状の道具で供物に振りかけ供物を浄化する。

供物を浄化した後、その後僧はマントラを唱えながら、刷毛で聖水を自身の身体や頭部に振りかけ浄化する。続いて線香を左手で持つ金剛鈴のくぼみに差し入れ、その後金剛鈴に花をつけながらマントラを唱える<sup>9</sup>。僧がマントラを唱えている間、僧の妻は別の容器から聖水を勺ですくい、小さなガラス容器に移し、供物が置かれた場所にその容器を置く。

次に僧は金剛鈴を鳴らしながら、マントラを唱えて自身の両手の手指に聖水をかけ浄化する。“*oṃ iṃ namaḥ, oṃ taṃ namaḥ, oṃ aṃ namaḥ*”云々と唱えながら、右手親指、人差し指、中指、薬指、小指の順に浄化し、“*oṃ haṃ hṛdayāya namaḥ, oṃ riṃ kāyasirase namaḥ, oṃ bhūr bhuvā*”云々と唱えながら、同様に左手の5本の指を順番に浄化する。その後次々とマントラを唱えるが、その中には pañcākṣaramantra と呼ばれるマントラやインド由来で現代のバリ・ヒンドゥー教の中で最も重要で基本的な gāyatrīmantra も含まれている。

一連のマントラを唱えた後、僧は“*oṃ bhūr bhuvāḥ svāḥ svāhā. mahāgaṅgāyai*”<sup>10</sup> *tīrtha pavitrāni svāhā*”と唱え、草のできた刷毛で容器内の聖水をかき混ぜる。この行為が聖水を作る行為である Argha Patra

<sup>8</sup> (Pudja 2007: 85) (Lévi 1933: 8)

<sup>9</sup> この部分のマントラはテキストには見られない。

の中心的部分であり、この場面で容器の水が普通の水から聖水になると考えられる<sup>11</sup>。またその後僧はすぐに聖水に浸した生米 (B.bija) を自身の額や胸など付け身体外部を浄化し、続いて身体内部の浄化のため、右手で聖水を手に取りそれを飲む。

実際はこの水は、この場面に至る前に供物の浄化などで使用されているが、これは僧侶が聖水として前もって準備したものである。ここではさらに一連のマントラが唱えられ、この過程を通じて聖水は段々とその聖性を高めていくと考えられる。一連のマントラの後、僧は薄い金のシートをはさみで切る。その金のシートとともに、銀、真鍮、鉄のかけらが先ほど作られた聖水に入れられ、この行為で最終的に聖水が完成する。

聖水が完成した後、僧は数珠 (mālā) を首にかけながら “om hram ma japan grhaisvaḥ satprayojanam dehi” 云々というマントラ<sup>12</sup>を唱える行為 (B. Japa Gaṇitri) を行う。これも儀礼で使用される数珠をマントラで浄化する行為である。その後僧は “valkalaṃ ca mahādivyaṃ pavitraṃ pāpanāśanam, ākāśatattvabhūtaṃ ca varanadaṃ pratiṣṭhitam” と唱え<sup>13</sup>、儀礼用の宝冠 (B. bhawa) に聖水をかけ、また線香の煙で触れ、その後宝冠を被る (写真6)。宝冠を被った後、僧はPrasādakālaśiva, Sthitikālaśivaなど14の姿をとるシヴァ神へ敬礼するマントラ<sup>14</sup>を唱える。この行為で<1.1>の聖水作りと供物、器具、僧の身体の浄化のプロセスは終了する。

#### <1.2> 聖水による浄化

以上の<1.1>のプロセスで聖水が完成した。続いて僧は、左手で金剛鈴を鳴らしながら、葉と結び合わされた赤い小さな花 (B.kalpika) を右手に持ち、“om saṃ namaḥ, om baṃ namaḥ”などとマントラを唱える。ここでは四方四維および中央の10の方位へ「十種子」(daśākṣara)

<sup>10</sup> (Pudja 2007: 180) ではmahāgaṅgāyoとなっているが、(Lévi 1933: 21) を採る。

<sup>11</sup> パラマダルマ師のご教示による。

<sup>12</sup> (Pudja 2007: 218)

<sup>13</sup> (Pudja 2007: 74) 参照。

<sup>14</sup> (Pudja 2007: 75-76) 参照

と呼ばれるマントラが計10回唱えられ、儀礼の場が浄化される（中央に対しては2回マントラが唱えられる）。続いて僧はbyakalaと呼ばれる供物に対して、Durmangala、Prayasicitaというマントラを立て続けに唱える<sup>15</sup>。一方僧の妻は「リス」(B. lis)と呼ばれるほうき状の道具を僧の前に掲げる。僧はマントラを唱えながら、刷毛状の道具でリスに容器の中の聖水を振りかけ、リスを浄化する。また僧は妻にkalpikaの花を渡し、妻はその花をリスの中に差し入れる。またこの行為の際、僧はPaśupati (シヴァ) への讃歌を唱える。

その後僧の妻は、儀礼の場であるpawedaanの内部に置かれたdurmangala供物およびリスそれぞれを左手と右手に持ち、建物の軒先に出、この施設内の寺院の社が建ち並ぶ空間に面と向かう。僧がマントラを唱えている間、妻は左手でdurmangala供物を持ち、右手で持ったリスを回し、寺院の社すべてを聖水で浄化する（写真7）。その間僧は自身の胸の前で両手を広げ、左右の中指の先を着ける印を結ぶ。その後も僧は“*om om paramaśivāya namaḥ, om om sadāśivāya namaḥ*”云々というマントラを唱えながら、金剛鈴のくぼみに灯明を差し込むしぐさを行う。この行為はdīpaprakakṣiṇaと呼ばれる<sup>16</sup>。その後も僧はマントラを唱え続け、その間前に置かれた供物に右手に持った花を投げ、また聖水を振りかけ浄化する。このように供物や社の浄化は何度も繰り返し行われ、神々を儀礼の場に招き入れる準備を行う。

<1.3> 神々を儀礼の場に引き寄せること、神々への供物の献供  
(B. Ngayabang Banten)

<1.4> 悪鬼への供物の献供 (B. Ngayabang Segehan)

ここでは僧はマントラを唱え、儀礼の場に神々を招く。ここで招かれる神々は、シヴァ、スーリヤなどの男神のほか、サラスヴァティー、プリティヴィー、スリー (Śrī) 女神、また祖霊 (B. Batara Kawitan) や八方位と中央を守護するnawasangaと呼ばれる男神のグループなどである<sup>17</sup>。

<sup>15</sup> これらのマントラは本稿で参照した*Wedaparikrama*テキストには含まれない。

<sup>16</sup> (Pudja 2007: 104)

儀礼の場に神々や祖霊を招いたのち、僧は“*om puṣpadantāya namaḥ*”などと唱えて、自身の目の前にある供物 (B. Banten) を神々に捧げる。一方僧の妻は建物の軒先に立ち、右手を揺らす *natab* を行いながら、供物を寺院内の神々にも捧げる (写真 8)。*'natab'* とは、バリ語で「触れる」の意味であり、バリ・ヒンドゥー教の儀礼において頻繁に行われるが、実際は供物等に触れることはなく、対象に向かって両手をゆっくりと振る動作を指す。儀礼の中で神々の気を子どもに送ったり、この場面のようにに神々に供物を捧げたりする時にも用いられ、気あるいはエネルギーを送る、もしくは神々からの気あるいはエネルギーを受け取ることを意味すると思われる。

神々に供物を捧げた後、僧は悪鬼 (B. Bhutakala) に *segehan* と呼ばれる炊いた飯、塩、赤玉ねぎなどを混ぜて小さなかたまりにした供物を供える。バリ・ヒンドゥー教の儀礼においては、神々に供物が捧げられたのち、必ず悪鬼にも供物が捧げられる。この時僧は左手で金剛鈴を鳴らしながらマントラを唱え、最後に灯明を金剛鈴のくぼみに差し込む所作を行う。この悪鬼への *segehan* の献供の行為によって、1 の準備的儀礼は終了し、2 の中心的儀礼が始まる。

## < 2 > 中心的儀礼

### <2.1> byakala 供物への *natab*

1 の準備的儀礼においては僧による聖水作りが中心であり、当日バユ・オトン儀礼の執行を僧に依頼した祭主はほとんど何も行わなかった。2 の中心的儀礼では、祭主も儀礼に積極的に関わるようになる。儀礼の最初に、祭主は椅子に座ったまま合掌を行う。その後、僧の妻が前述の <1.2> のプロセスで浄化された *byakala* 供物を祭主のところに運び、供物の盆からバリ・ヒンドゥー教の儀礼で頻繁に使用される中国古銭のレブ

<sup>17</sup> これらの招かれるべき神々をパラマダルマ師は '*istadewata*' と呼んでいた。 *nawasanga* に関しては (山口 2003: 54) 参照。また *Wedaparikrama* にはここで呼び出す女神として *Brāhmī*, *Maheśvarī*, *Kaumārī* などの七母神に *Gāmendrī* を加えた 8 名の女神の名が見られる (Pudja 2007: 111)。ネパールでも八母神はポピュラーであるが、*Gāmendrī* 女神はネパールでは見られず、代わりに *Mahālakṣmī* が 8 番目となる。



リカ、および葉を取り出し、祭主の両手の中指と人差し指の間に挟ませる。また妻は祭主の頭頂に葉を乗せる（写真9）。その間僧は特段の行為は行わず、またマントラも唱えない。その後僧の妻は祭主の胸、両肩、頭の部分を手でもった葉で払い、最後は祭主が両手を後ろに挙げて自身の頭に残った葉を払う。

次に僧はDurmangalaと呼ばれるマントラを唱える。その時、僧の妻はココナツの中に入れた聖水にリスを浸し、リスでその聖水を祭主の頭に振りかける。その後僧は祭主の過去犯した罪の贖罪のため Prayascitaと呼ばれるマントラを唱える<sup>18</sup>。いっぽう妻はbyakala供物を左手に持ち、供物の盆に置かれたココナツの実の中に入った聖水を祭主に振りかける。祭主は椅子に座ったまま両手を揺らしてnatabを行う。これらのマントラは次のプロセス<2.2> Bayuh Oton のnatabの準備として唱えられていると考えられる。

#### <2.2> Bayuh Otonのnatab

次に僧侶は祭主の氏名などを述べ、その後Śivagamanaと呼ばれる、世界主 (jagatpati) であり障碍を無くすシヴァ神のマントラ<sup>19</sup>を唱える。この時祭主は両手を揺らしてnatabを行う（写真10）。ここでは祭主はnatabを行い、シヴァ神のエネルギーを受け取っていると考えられる。

#### <2.3> 聖水による浄化 (B. Melukat)

続いて祭主の聖水による浄化の行為が行われる。バリ・ヒンドゥー教は「聖水の宗教」(B. agama tirta) とも呼ばれ、儀礼において聖水を受け取ることが最も重要と考えられている。この日、祭主の実家付近の川から家族が採取した水を祭主が儀礼の場に持参してきたが、その水はあらかじめ儀礼が行われた施設の寺院内の社に置かれ聖化されていた。いっぽう儀礼の中でこれまで聖水として使用していた水は、僧が夫妻は

<sup>18</sup> *Wedaparikrama* (Levi 1933: 27) にも Prayascita のマントラが記述されているが、ここで僧が唱えるマントラはそれとは異なっている。

<sup>19</sup> ここでは僧は自身が所有するバリ文字手書きのテキストを用いており、その文言は (Gourdriaan & Hooykaas 1971: 454) の *Sadāśivastava* に類似する。

近隣の川から水を採取し儀礼により聖化したものを使用している。まず僧は<2.2>で述べた*Sivagamana*を何度も唱える。また僧の妻は聖水となった祭主持参の水の入った瓶を寺院内の社から儀礼の場である pawedaan に持ち込み、僧夫妻が準備した聖水とともに祭主に頭から何度もかける（写真11）。

#### <2.4> 儀礼用ブレスレットの着用 (B. Mejajaya)

大量の聖水を浴びて浄化された祭主はいったん施設内の別の場所に移動し着替えを行い、再び儀礼の場に戻った後、次の次第が始まる。ここでは僧は白、赤、青の三色の糸を纏った儀礼用のブレスレット (B. karawista) を祭主の右手首に巻き（写真12）、祭主は合掌する。僧侶のパラマダルマ師によれば、この行為は祭主が背負ってきた人生の負債が消滅することを意味する。続いて僧は聖水に対するマントラを唱え、容器に入った聖水を祭主の右の手のひらに3回注ぎ、祭主はそれを飲み、身体内部を聖水で浄化する。その後僧はクシャ草<sup>20</sup>で作られたバンド (B. sirawista) を祭主の額に巻く。その後僧は右手に灯明、左手に金剛鈴を持ち、鈴を鳴らしながら “*om om paramasivāya namaḥ, om om sadāsivāya namaḥ, om om sadārudrāya namaḥ*” 云々というマントラ<sup>21</sup>を唱え、その間祭主は両手を揺らし natab を行っている。僧によれば、このバンドを祭主の額に巻く行為は祭主の頭部を浄化する役割を持つ。

#### <2.5> すべての供物への natab

#### <2.6> 礼拝 (B. Sembahyang)

祭主の頭部が浄化された後、僧の妻と祭主は寺院内に置かれたすべての供物に対して natab を行い、儀礼の場に招かれたシヴァ神を始めとする男神、女神たちにすべての供物を捧げる。その後神々に対して礼拝 (sembahyang) が行われる。ここでの礼拝は特別なものではなく、バリ・

<sup>20</sup> クシャ草はインドの祭式でも使用される植物 (学名 *Poa cynosuroides*) であるが、この儀礼で使用された植物の入手経路等は現在不明であり、今後調査の上明らかにしたい。

<sup>21</sup> (Pudja 2007: 104)

ヒンドゥー教徒が寺院等で行う一般的な「5つの礼拝」(B. Pancasembah) が行われるとされる。「5つの礼拝」とは、通常①両手に何も持たず礼拝(礼拝者の浄化)、②バリ・ヒンドゥー教の最高神サン・ヒャン・ウィディ・ワサSang Hyang Widhi Wasaへの礼拝、③自身の守護神(B. iṣṭadewata)の顕現としてのサン・ヒャン・ウィディ・ワサへの礼拝、④神からの恵みを受け取るためのサモダヤ神Samodayaとサン・ヒャン・ウィディ・ワサへの礼拝、⑤結びの礼拝である<sup>22</sup>。

このバユ・オトン儀礼においては、まず僧は祭主に、火をつけた複数の線香を手渡す。祭主はそれをもって合掌する。その後僧は、“*om ātmatattvātmā śuddha mām svāhā* (上記①のマントラ), *om puṣpadantāya namaḥ* (上記②のマントラ)”云々と唱え、祭主は両手を額の高さに挙げて礼拝する(写真13)。この日僧は実際には上記の5つの礼拝のマントラのみならず、サラスヴァティー女神、プリティヴィー女神などへの敬礼の文言を唱えていた。

#### <2.7> 聖水を求めること (B. Nunas Tirta)

次に、この中心的儀礼の最後の部分である聖水を求める行為が始まる。僧は祭主が持参し儀礼で聖化された聖水の瓶に、僧側で準備した聖水を入れる。僧の妻はその瓶の聖水を刷毛状の道具で寺院内の社の神々に向かって撒く。その後祭主は僧の妻から右手でその瓶の聖水を受け取り3回飲み(写真14)、その後妻は祭主の頭部に聖水を振りかける。最後に祭主は妻から聖水に浸した生米(B. bija)を受け取り、自身の額を両耳の後ろに付ける。自身のこの行為で中心的儀礼は終了する。

#### <3> 結びの儀礼：プラス供物へのnatab (B. Natab Banten Peras)

中心的儀礼が終了した後、最後に結びとしてプラス供物(B. banten peras)へのnatabが行われる。僧の妻は寺院境内の供物が置かれている台に行き、それらの供物入れから鶏の肉や生卵、飯などを小さな容器に取り、儀礼の場に持ち帰る。その小さな容器の供物が「プラス供物」と呼ばれる。続いて僧はマントラを唱える。その間妻は左手でプラス供物

<sup>22</sup> (Suhardana 2008: 17-18)

を持ち、一片の花を右手人差し指と中指で挟みながら右手を揺らして natab を行う。いっぽう祭主も両手を揺らしてプラス供物に対して natab を行う (写真15)。<sup>23</sup> 'peras' とはバリ語で「[養子の]身請けのための金」「償うもの」「あがなうもの」を指すが、ここではプラス供物に natab を行い、神々の力を受け取ろうとする行為であると推察される。このプラス供物の natab で、この日のバユ・オトン儀礼はすべて終了した。

### 3. 結び

以上、バユ・オトン儀礼の次第について述べた。この儀礼全体にかかった時間は約1時間であるが、<1>の準備的儀礼のうちの<1.1>の聖水作り (Argha Patra)、およびマントラによる供物、器具、僧の身体浄化におよそ4分の1の13分以上を要し、聖水作りが儀礼において非常に重要であることを示している。また<1.2>の供物を聖水で浄化する行為も適宜サンスクリットのマントラを伴った入念なものである。そのマントラには多くの種子が含まれており、タントリックな要素を多く含んでいることが感じられる。

また<1.3>の神々を引き寄せ供物を捧げる行為にかかる時間はむしろ短めであり、前もって準備しておいた大量の供物を natab という行為で捧げる行為が中心となっている。インドのヒンドゥー教では、例えば「16種供養」(śodaṣopacārapūjā) のように16の供養のアイテムが一つ一つマントラを唱えながら順番に供えられる。いっぽうバリ・ヒンドゥー教では前日までに様々な種類の供物 (banten) を用意することにより注力しており<sup>23</sup>、当日はそれを適所に配置して短い時間で神々に捧げるのが一般的であり、それはこのバユ・オトン儀礼においても同様であった。

<2>の中心的儀礼においては、準備的儀礼では全く行為を行わなかった祭主が、僧の指示にしたがって儀礼行為を積極的に行う。またこの中心的儀礼の部分では僧の妻が僧と祭主、また神々と祭主の間で両者を繋

<sup>23</sup> これらの供物は従来儀礼に際して数日前から家庭の女性たちによって作られてきたが、近年では供物作り専門の業者に注文することも多く、今回のバユ・オトン儀礼もそのような専門業者に依頼した供物が用いられた。

げる重要な役割を果たしていた。

ここではMelukatと呼ばれる聖水による祭主の浄化の行為が行われるが、ここでは祭主が持参し儀礼の場で聖化された水と僧侶側が用意した聖水両方が使用される。バユ・オトン儀礼はそもそも誕生1年目を祝うオトナン儀礼を行っていない者に対して行われるものであり、祭主の「生家」で入手した水を用いることに特別な意義があるのだと考えられる。また祭主に聖水をかけるこの行為は何度も繰り返行われるが、祭主はこの繰り返しの聖水による浄化のあと、一種の「再生」を体験するのではないかと推測される。本稿の儀礼だけでなく、バユ・オトン儀礼では祭主はMelukatの後着替えを行うのが一般的である。聖水により古い自分を一度滅し、新しく生まれ変わった状態になったうえで、次に<2.4>のプロセスである儀礼用のプレスレットやヘアバンドを着用し、すべての供物をあらためて神々に捧げ自身の守護を祈るのだと考えられる。

さて本稿で取り上げたバユ・オトン儀礼において僧が主に使用したテキストは、*Wedaparikrama*および*Bayuh Oton Ring Kamulan*であった<sup>24</sup>。特に聖水作りの際唱えられたマントラは多くが*Wedaparikrama*からであった。このテキストは僧の衣服の着用から始まり聖水作り、聖水による浄化、神々への供養などが比較的体系的に述べられた儀軌であるが、この日の儀礼においては必ずしもテキストの次第に忠実に儀礼行為がなされたわけではなかった。同テキスト次第の順序を前後してマントラが唱えられ対応する行為がなされる場合や、省略されたり逆に他のテキストの文言が挿入される場合も多々あった。

現在のバリ・ヒンドゥー教では、儀礼内容の地域差もあるが、個人差もあり、僧によっては自身の師が教示した内容に新たに自身がその後独自に学んだマントラや行為を儀礼に追加して儀礼を行う例が見られる。したがって本稿で取り上げたバユ・オトン儀礼も、これが「スタンダードなバリ・ヒンドゥー教のバユ・オトン儀礼」と判断することは難しい。

<sup>24</sup> 儀礼を行ったパラマダラマ師によれば、その他*Kusumadewa*というテキストや、オランダ人研究者GourdriaanとHooykaasが編纂したバリ・ヒンドゥー教の神々への讃歌の集成*Stuti and Stava* (Gourdriaan & Hooykaas 1971)も適宜参照、使用しているとのことである。

他のバユ・オトン儀礼の例と構造比較し、基本的な構造と儀礼ごとの特色について考察することが今後の課題である。

また今回の主要なテキストであった *Wedaparikrama* はすでに複数の校訂本とインドネシア語訳が出版されているが、このシヴァ派の文献と見られるテキストの系統やタントリックな要素についても今後の研究の課題としたい。

#### 参考文献

- 山口しのぶ 2003 「バリ・ヒンドゥー教の神々」『中京女子大学アジア文化研究所論集』第4号、pp.53-100.
- 山口しのぶ 2015 「バリ・ヒンドゥー教の人生儀礼—生後3ヶ月の儀礼『トゥルプラニン』を中心に—」『東洋思想文化』2号、pp.94-115.
- 山口しのぶ 2019 「インドネシア、バリ島の寺院におけるシヴァ=ブダ観念の表出—バリ・ヒンドゥー寺院に見られる仏教的要素を中心として—」『東洋思想文化』6号、pp.88-108.
- Pudja, G. 2007 *Wedaparikrama Satu Himpunan Naskah Mantra dan Stotra Teks Asli Bahasa Sansekerta dan Penjelasannya*. Paramita, Surabaya.
- Lévi, Sylvain 1933 *Sanskrit Texts from Bāli* (Bālidvīpāgranthāḥ). G.O.S No.67, Gaekwad Oriental Institute, Baroda.
- Gourdriaan, T. & Hooykaas, C 1971 *Stuti and Stava* (Bhaudā, Śaiva and Vaiśṇava). North-Holland Publishing Company, Amsterdam, London.
- Suhardana, K.M. 2008 *Pūjā Tri Sandhyā dan Kramaning Sembah*. Paramita, Surabaya.

【注記】 本稿は2019年度科学研究費補助金による研究「インドネシア、バリ・ヒンドゥー教におけるインド宗教の受容と変容に関する研究」の成果の一部である。

<付録>バユ・オトン儀礼の写真



写真1 祭主は実家の家庭寺院の社に水を詰めた瓶を供え、ブラフマー、シヴァ、ヴィシュヌの三神に礼拝する。



写真2 バユ・オトン儀礼が行われた建物pawedaan。この写真はまだ準備中の時のもので、建物の床にある供物の盆はその後他の供物台に置かれた。





写真3 pangunganと呼ばれる供物を置く場所

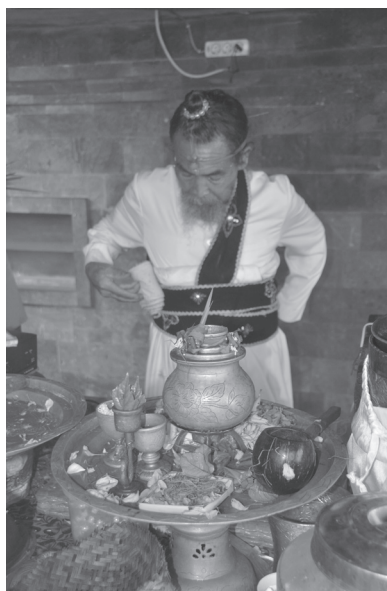


写真4 僧はマントラを唱えて、儀礼用の帯を着用する。





写真5 印を結んで、身体内部を浄化する僧。



写真6 聖水が完成した後、次の行為を行う準備として宝冠を被る僧。



写真7 僧の妻はリスを回しながら、聖水を振りまく。



写真8 僧の妻はnatabを行って供物を神々に捧げる。



写真9 僧の妻は祭主の頭頂に葉をのせる。



写真10 祭主はnatabを行い、シヴァ神の力を受け取る。



写真11 僧の妻は聖水を繰り返し祭主に注ぐ。



写真12 儀礼用のプレスレットを祭主の右手に巻く僧。



写真13 両手を挙げて合掌し「五つの礼拝」を行う祭主。その間僧は神々への礼拝の文言を唱える。

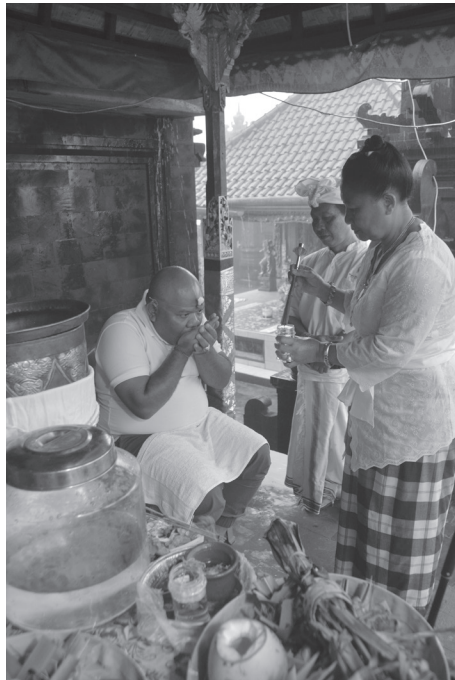


写真14 僧の妻から聖水を右手で受け、口にする祭主。





写真15 プラス供物にnatabを行う祭主。この間僧は金剛鈴を鳴らしマントラを唱える。